

市仏連会報

発行所
 横浜市中区大平町96
 光明山西有寺内
 横浜市仏教連合会
 電話 045(661)0166

阪神大震災に直面して 今、我々は何をなすべきか

横浜市仏教連合会会長 滝川 覚道

一月十七日早朝、突然襲った兵庫県南部の大地震の報に一瞬、わが眼を疑い、次々に報ぜられる惨状に心の凍る思いです。被災の方々の救出と安全を願い、惨禍の拡大を一刻も早く防止されることを祈らずにいられませんでした。

私共では、阪神地区に法縁・知人の寺院も多く、親類や檀家の方々も居られます。安否を気づかない各地に電話したのですが、被災地への電話は通ぜず、只々、無事を祈るばかりでした。その内、現地をお見舞いし視察した方々からの情報と被災者からの電話も通じるようになり、災害の大きさを知り、今更乍ら天災(人災も含めて)の恐しさを痛感しました。今や国の内外を問わず、凡ゆる組織を通じて

海照寺の檀家で芦屋市に在住、国語塾を主宰している宮崎隆さんが、お見舞いの札状に添えて被災の体験記を寄せてきました。参考までに転載しました。

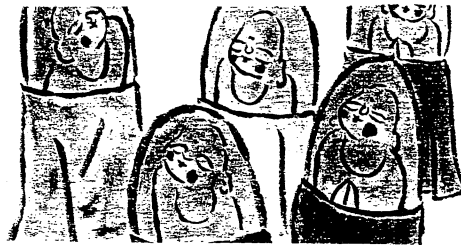
常務理事会と 納会報告

平成六年十二月五日(月) 於桂月、午後五時より。出席者、会長 滝川 覚道海照寺住職、副会長 玄野 孝善長昌寺住職、副会長 兼 専務理事 事川上 敬吾松蔭寺住職、磯子区 仏鷲雄興勝大聖院住職、緑区 仏齋藤 隆法福聚院住職、保土ヶ谷区 仏安達宏識大仙寺住職、港北区 仏・釈尊奉讃会事務局 局長 程木 徳明東照寺住職、神奈川区 仏 齊藤 幸紹善龍寺住職、西区 仏 都築 哲信勸行寺住職、会計 橋下 賢明浄念寺住職、顧問 弁護士 遠藤 隆也氏、ピーエス 観光代表 真川 明氏、会報 備前 恭忍 西福寺住職ら十三名。



滝川会長挨拶。団参(春・秋)報告、慰霊堂法要、会報発行、今後の予定行事説明は川上専務理事。第二十回釈尊涅槃会の件、開催

日は平成七年二月十一日(土)午後一時受付、当番は鶴見区仏教会会処は成願寺(曹洞宗)、講師は智廣寺橋本正博住職(真宗大谷派)で演題は未定。次に第十二回春の参拝旅行先は鰻阿寺、呑竜さまで平成七年六月一日(木・友引)に決定。六時過ぎより納会に移り懇親を深めた。



第十二回春の 参拝旅行実施要項

期日 平成七年六月一日(木)
 会費 八八〇〇円也
 日程 栃木県鰻阿寺(真言宗)と群馬県大光院・呑竜さま(浄土宗)申し込先は各菩提寺へ、申込メ切りは五月十日。各区仏の会長様は取りまとして、市仏連専務理事の川上敬吾師まで報告をして下さい。

遅ればせながら阪神大震災の殉難者の追悼と被災者への、お見舞いを申し上げます。
 横浜市仏教連合会

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|----|-------|----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|-----|------|----|
| 名誉会長 | 梅田 信隆 | 顧問 | 志村 慎吾 | 顧問 | 柳下 隆侃 | 参 参 | 森山 正城 | 参 参 | 福永 隆昭 | 参 参 | 与山 敏明 | 会 会 | 横山 敏明 | 会 会 | 滝川 覚道 | 副会長兼 | 玄野 孝善 | 副会長兼 | 川上 敬吾 | 会 会 | 橋下 賢明 | 会 会 | 齋藤 隆法 | 墓地委員長 | 奈良 光雄 | 会報担当 | 備前 恭忍 | 監 監 | 野沢 隆幸 | 監 監 | 内野 公雄 | 顧問 | 遠藤 隆也 | 他役員 | 常務理事 | 一同 |
|------|-------|----|-------|----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|----|-------|-----|------|----|

四国八十八ヶ所巡礼の旅

横浜市仏教連合会副会長 玄野 孝善

平成六年十一月二十四日木曜日
今日は待望の四国巡礼の旅の出発日である。

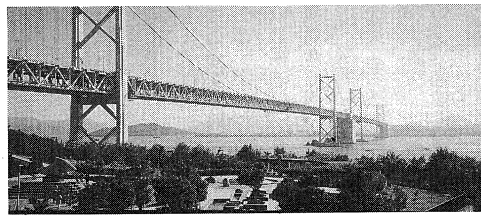
夜がしらじら明けかかってきた六時ころに、もう檀家の皆さんが見えて、ご住職今日はよろしくおねがいしますと、玄関の前に立っている。こちらこそよろしくおねがいしますと、挨拶をかわし、すぐに新横浜にむかった。今日は天気も上々で気分も大変さわやかである。

六時五十分の集合時間になると六十七名全員が集った。七時二十三分発の「ひかり三十三号」に乗車し「岡山」へ向った。

午前十一時に岡山到着、それから観光バスに分乗し香川県へと走り出した。私たちの車のガイドさんは、すこし太めで、ちょっと質問をしてみようかなと思っていきましたら、「私の体重とヒップは質問しないでください」とはじめからことわられてしまいました。

しかし、地元のガイドさんだけあって大変悠長なガイドぶりである。そうこうしているうちに瀬戸大橋にさしかかりました。天気はともよいので、瀬戸の海がまるで絵を見ているように美しいながめでした。坂出インターより香川県に入り琴平で昼食となり、四国名物の「さぬきうどん」に舌づつみを打ちました。こしがあってとてもおいしくいただきました。

昼食後いよいよ四国お遍路さんの旅のはじまりです。金剛杖に白装束のいでたちで、なんとなくてれくさいような気がします。でも皆さんがたははりきっています。さっそく着いたのは「満濃池」です。ここは昨年のように漏水になったときの用水池です。むかし弘法大師が漏水をみこんで作られた池といわれています。それが今で



も活用され地域にとっては大切な用水池となっているのです。そこで全員記念写真を撮ってこれから、本格的な巡礼の旅である。

最初は第七十七番の道隆寺の参拝である。白装束に金剛杖のいでたちでお唱えする般若心経はなかなか重厚の趣があります。次に第七十六番金隆寺を参拝、同じように般若心経を、おとなえ

してお詣りをすませました。そして、今日最後となった第七十五番の善通寺に到着、バスを降りるとさっそく太鼓橋を渡る。

そこで、注意があった。橋を渡るときは、橋の上で杖をついてはならないということです。お話を聞くと、弘法大師さまは一夜の宿がなく橋の下にお泊りになられたことがしばしばありました。そこで、杖をついては大師さまに失礼にあたるということなのです。

一行は金堂で読経の後、御影堂に案内されそこで法話をいただき戒壇めぐりをしました。御影堂の地下でまっ暗である。すなわち今は仏さまなら体内をお詣りしているわけでありませう。そして出口近くになると弘法大師さまのお声でお説教がありしばらくは、そのお話を拝聴しました。

ここ善通寺は大師さまの御誕生の地でありまして大師自ら建立した真言宗発祥の根本道場で、真言宗善通寺派の総本山であります。御父は佐伯善通、御母は玉寄御前と申し宝亀五年六月十五日に現在の御影堂の地で御誕生になられた。大師は唐(中国)より帰られた大同二年より六年間をかけて七堂伽藍をお建てになり御父の名をとり善通寺と称したのです。

京都の東寺、高野山とともに大師の三大霊場と称され信仰をあつめています。境内は東院と西院とにわかれ併せて約一万三千六百坪といわれています。午後六時ころ夕飯をいただき宿坊で静かに床につき、疲れをいや

し眠りにつきました。



翌朝五時起床、洗面をすませてすぐに御影堂(本堂)に行く。これから朝の勤経であります。静まりかえった本堂には冷たい靈気がただよっています。管長さんから法話をいただきました。勤経となりました。その後朝食をいただきました。バスは入ってゆきます。外は雨です。バスをおり、ロープウェイに乗りかえ雲辺寺にむかう。山のながめはともすばらしい、山頂の駅につくとそこはまるで暴風雨である。これでお詣りができるのかとだれしも思った。しかし雲辺寺につくころになると風雨もおさま

り皆笑顔になってお詣りができた。我々はおこないがいろいろとありません。この雲辺寺は四国霊場の中で一番海拔が高く、標高九一六メートルといわれ寒さも一段と厳しかったです。お詣りが終ると再びロープウェイで下界におり、バ

スで松山に向った。その途中で昼食をとり冷えた体をさぬきうどん

で温めた。そして、第五十一番の石手寺へと走った。午後二時ころ石手寺の門前に到着し早速般若心経をお唱えし参詣をした。この石手寺には有名なお話がのこっていました。それは衛門三郎のお話です。石手寺のさらに山奥に一つの部落がありました。その部落に衛門三郎という豪農がいました。ちょうど昨年のように日でりが続き農作物が全くとれませんでした。しかし、衛門三郎は容赦なく年貢をとりたてて来ますので地域の小作人はおびえたっていました。自分の家でもう食べるものもないとなると毛布まで、まきあげていってしまう衛門三郎はまるで鬼のような人でした。

その話を聞いた弘法大師はさっそく衛門三郎の家に托鉢に行きました。ところが何度行っても、お前なんかにやるものはない!とこ



とわられてしまいました。それでも大師は托鉢を続けますと、しみじみには大師さまの鉄鉢を床にたたきつけ、こなごなに割ってしまいました。

それから、幾日かして大雨が降り川という川は満水になってしまいました。その時、衛門三郎の長男が川原で遊んでいて、あっ！という間に濁流に流されてしまいました。まわりの人々はどうすることもできなく、ただ流れを見まもるだけでした。その後、長男は遺体であがり、悲しみのなかで葬儀がおこなわれました。

それからほどなく、葬儀のときの食あたりですか、次男が腹痛をおこし手当のかいもなく亡くなってしまいました。こうして、つぎつぎに八人もいた衛門三郎の子供はみな亡くなってしまいました。

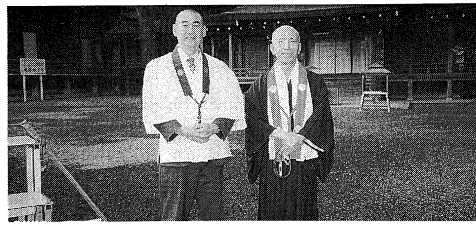
いままでも、小作人からまきあげた宝財も夫婦二人だけではとても使いきれません。さみしくなった衛門三郎はいままでの自分のやってきた行動を深く反省し、巡礼をし弘法大師さまにお会してお詫を申し上げようと旅に出ました。

しかし、会う人会う人あれが衛門三郎だよ！と白い目で見られ、つらい日が長く続きました。そうこうしているうちに持ってきた食物も金銭もつかいはたし、とうとう体調をこわし、倒れてしまいました。と、そのとき不思議にも弘法大師さまにお会いでき、

いままでのことを一切おわびいたしました。すると、大師さまは次に生れ変わるときはなにに

なりたいか。どたずねると、衛門三郎は心のやさしい人に生まれかわってきたいと申しました。

そこで大師さまは衛門三郎の右の手にひとつかみほどの石をにぎらせ、あの世におくりました。それから、幾年かしてかわいいう赤チャンが生まれました。だがその赤チャンの手に石がにぎられてい

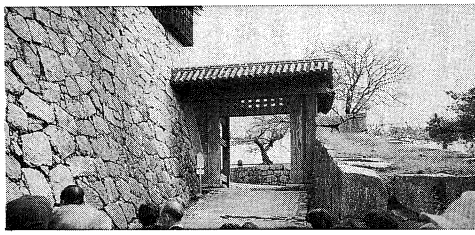


ないので、お寺に行きご祈禱をしてもらいますと、なんとすうっとその石が手からとれたではありませんか。それ以来この寺を石手寺とよぶようになったといわれています。そして今も石手寺のお堂の厨子のなかに、その石が納められています。

参拝後は名物の団子などを食べながら一路松山城に向いました。天気に恵まれた夕方の松山城は大変美しく、お城からのながめはパノラマ写真のごとく松山市内が一

十年前、戦国時代の勇将で、賤ヶ岳の七本槍で有名な加藤嘉明により築城されたもので、天守閣や城門、櫓などが重要文化財に指定されています。松山城の高さは海拔一三二メートル、天守閣の一階二五二平方メートル、二階一六八平方メートル、三階一〇二平方メートル、天守の高さは二一メートルであります。松山城を後にして、今夜の宿はポッチャンで有名な道後温泉であります。

旅館に着くと私はすぐにテレビによく出てくるあの道後温泉のお風呂に行きました。切符を買って改札口を入ると係の女性が案内をしてくれました。一階は一般の銭湯と同じようでした。二階は大広間があって団体のかたが利用しやすくなっていました。そして三階は個室で六畳間の和室で、ポッチャンはここによく来たのですと、案内されポッチャンの間というの

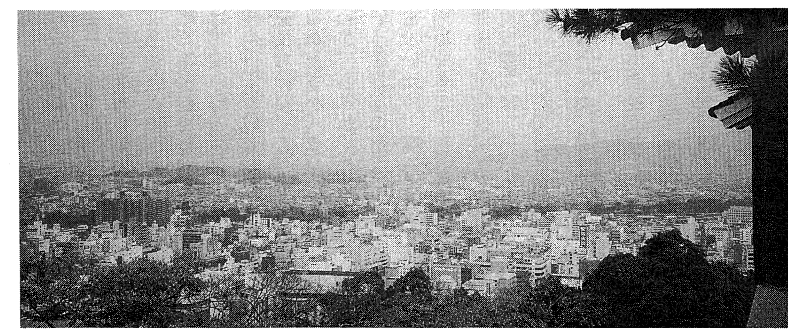


休憩し風呂に入りましたが、湯はかなり熱くピリピリしました。

風呂あがりにはポッチャンだんごにお茶をもちそうになり、宿にもどりました。宿では夕飯の宴会に会長の御挨拶等をいただきカラオケや日本舞踊などがにぎやかに催され、一同楽しくこの旅最後の一夜をすごしました。翌朝は再びバスで四国で一番海拔の高い山という、石鎚山に登りました。もう山頂は寒く雪がありました。ここへ登る道も十二月からは閉鎖とききました。しかし、岩山で、そこには老木があつてまるで、自然の箱庭を見ているようで美しい自然にめぐりあえました。そして、下山し、山合の店で鍋もので体をあたためて昼食をすませ、再びバスで一路松山空港にむかい各自みやげものなどを求めて午後五時十分発の羽田空港行きに塔乗し帰宅の途につきました。今回の旅は信仰を中心にして、観光も兼ねたとして

もすばらしい旅でした。横浜市仏教連合会、横浜市釈尊奉讃会では今後心にもこのすばらしい参拝旅行を企画いたしますので、どうぞ御参加いただきますようお願いいたします。筆を置かせていただきます。

- 今回御参加、
御協力のお寺院さま
海照寺様、保福寺様、東照寺様、西連寺様、高松寺様、東福寺様、松蔭寺様、長昌寺様、西福寺様、善昌寺様、天然寺様



「阪神大震災」体験記

宮崎 隆

一「意味」まで失って
 怖かった！突然（予知的に目を覚ましていた）、闇がうなり、振動して、ガガアッという音とともに崩れ、奇妙な叫びをあげて襲ってきた。気がついたら本箱と本の下敷きになっていた。その恐怖が、今だに体の中に硬い芯のようになつて残っていて、余震の度に蘇るのだ。

その恐怖と共に、人々は家族知人を失い、家を無くし、収入のあてを失ってしまったのである。そして、まさに頭の中が真っ白になつてしまったのだ。茫然自失とはまさにこのこと、「復興の足音」なんてマスコミは書き立てているが、現地の誰もが、そんな希望さえ無くしているのだ。ただ、絶望さえ失っているのであつて、一杯の熱いお茶をふるまわれて笑顔するばかりである。

そう、最初の三日間ぐらいは、われわれは「意味」さえ失つていたようだ。倒壊した家から子どもをひっぱりだし、無残なビルの下を走って、知人の安否をとにかく確かめ、ひびわれた道路に転びそうになりながら、右往左往するばかりだった。これがどれくらい規模の地震で、この先どうしたらベストなのか、どこへ行けば助かるのか、そんなことを考えたり、事実を意味づけたりする余裕はなかった。誰かが大変なことだと言うから、大変なことだと思ひ、

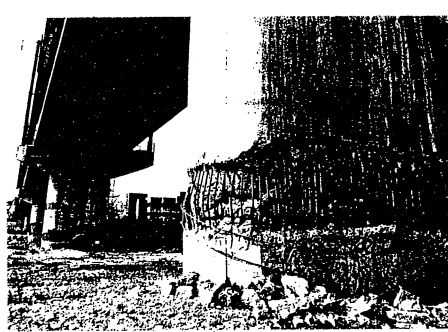
神戸の方がひどいそうだとどう言うから、そうなのかと思つたが、信じる心さえなかった。見たまま、経験したままを感じ、ひたすら恐ろしく、やたらに疲れを感じた。そこには絶望も希望もなかった。電気が付き、新聞が配られるようになって人々は、今回のことについて意味づけをし、投射（プロジェクトン）をするようになっていった。

そうして、さまざまな憶測が登場し、デマが流され、「悪人」が行し、「美談」が語られました。あるうことか、被災地に放火して歩く奴がいて、自警団が組織されわれわれはやつと残った家のドアを閉めるべきかどうかまよっている。人は思うように物を見る、という「投射」が再び強烈に働きだし、新たな恐怖にさいなまされていく。これももう一つの「二次災害」かもしれない。

思えば、われわれは、目前の事実だけを見るといふ得がたい体験をしたようだ。暴動を起こさなかつた市民の冷静さが新聞で評価され、略奪もせずに行列を作る人々の忍耐強さを外国のマスコミが取り上げていたが、われわれは、意味付けする以前に行動していた。犬や猫と同じように、動物的に「意味」もなく、本能的というのでもないのだが、ただ人間として行動し、生き延びていた。二「ここ」を離れたくない！大恐怖の当日は、茫然自失のまま

ま夜になり、とにかく避難所の中学校へ行つてみたが、満員で入ることも出来ない。途方に暮れていると、家がつぶれて同じ市内の別のところに避難していた知人に会い、そこへ連れていってもらった。その翌日も別の見知らぬ家に泊めてもらった。三日目によく甲子園まで通じた阪神電車に乗るべく、破壊された町を追われるように抜け、大阪の山仲間の家にたどりついた。

大阪に着いて、わたしはすくなくからず憤慨した。なぜって喫茶店が開いているし、人々は普通に歩き来ているからだ。そこには、芦屋のように戦争を思わせる雰囲気は皆無だったのだ。空にヘリコプターが爆音を響かせ、海には軍艦が見え、道路には自衛隊があふれ、必死の顔をした避難民が充滿している。救急車や消防車のサイレンは鳴りっぱなしだし、顔に包帯をした人が、倒壊したビルの前



に立ちつくしている。避難所の隣に室が遺体置場になっていたり、いまだにあそこに人が生き埋めになっていると言いがら、人々は水を汲んでいるのだ。——そんな光景は微塵も無く、しかも腹立しいことに、こっちがほしいパンやガスボンベだけは、かれらの買占めによってないのである。

大阪や京都の知人の多くが、掛かりにくい電話を何度もして、「うちへおいで」と言ってくれる。しばらくは仕事も生活も成り立たないだろうから、との心配と善意を寄せられる。それはうれしかったし、知人たちを恨む気は毛頭無いのだが、わたしは翌日には、また芦屋に帰ってきた。ようやく電気は付いたが、水もガスも無く、余震の続く我が家に。

塾生だった女の子が、父の赴任先の北九州へ行くのがいやだと、泣きわめいたという。かの女は、親友の死を市民病院で看取っているのだ。そして、従兄弟の高校生は、建物の下敷きになり、肋骨を折る怪我をしている。「別にこの町が故郷でもなく、普段からそれほど愛着を持っていたわけでもないのに、何故か離れたくないのですよ」と笑う。

ものだが……。
 大阪なんかに行っていたら、緊張感がなくなつてしまつて、頑張って生きぬく気力まで失うから、と当初友人には説明したが、この町で学習塾をしてきたものとしては、この町のひとごととことん付き合つて、成り行きを共にしたい感情なのだ。ここで再び塾が出来るかどうか、まったく予想も付かぬが、とにかくここにいたい、という思いなのだ。だから、何キロも歩いたり、周り道をしながら、尋ねてきてくれることが、一番嬉しい。とにかくこの惨状を自分の目で見てほしい。そして、私の大変さに声を掛けてほしいのである。

大災害悲報に接して

滝川会長よりの手紙に、会報の件で、大震災への協力を呼びかけるにとどめます。宮崎隆氏の被災体験記を同封しました、と書かれていた。生々しい体験記に絶句。何をなすべきか。あらゆる角度から真剣に取り組もう。

二月十七日に、区仏仏よりや滝川会長、宮崎氏の原稿の初校正をしながら、テレビをつけた。丁度阪神淡路大震災発生一ヶ月目ということ、県庁や避難場所や殉難者諸精霊のご冥福のために一分間の黙禱の場面の生中継であった。私も合掌祈念を申し上げた。涙がこみあげてきた。各区仏でも義援金托鉢などをされたり、支援協力に積極的に取り組んでいられる。被災地の一日も早い復興と寺院の通常の宗教活動の展開を願う。

祈

震災見舞
災害復興

横浜市仏教連合会会長

高野山真言宗海照寺住職

滝川覚道

〒235 磯子区坂下町四一九
☎電話 七五一―七二〇四

横浜市仏教連合会参与

曹洞宗西有寺住職

横山敏明

〒231 中区大平町九六
☎電話 六六一―〇一六六

横浜市仏連税務委員会委員長
緑区仏教会長

高野山真言宗福聚院住職

斎藤隆法

〒220 都筑区池辺町二二九六
☎電話 九四一―一三六六

横浜市仏教連合会副会長兼専務理事

臨濟宗建長寺派松蔭寺住職

川上敬吾

〒230 鶴見区東寺尾一一一八―一
☎電話 五七一―一七〇一

横浜市仏教連合会副会長

保土ヶ谷旭区仏教会会計監査

曹洞宗長昌寺住職

玄野孝善

〒241 旭区さちが丘五九九
☎電話 三九一―一三七九

横浜市仏教連合会御用達

東海ビーエヌ観光株式会社社長

真川明

〒240 保土ヶ谷区西久保町一一四
公園ハイツ二一一八
☎電話 三三四―三三〇〇

横浜市仏教連合会顧問弁護士

遠藤隆也

〒221 (自宅) 神奈川区白幡上町一八四
〒110 (事務所) 台東区東上野二一八―一七
☎電話 〇三―八三二―二八一九

横浜市仏教連合会常務理事

瀬谷区仏教会長

曹洞宗徳善寺住職

尾崎正恵

〒246 瀬谷区本郷三三六―一六
☎電話 三〇一―〇一九二

横浜市仏教連合会常務理事

磯子区仏教会長

高野山真言宗大聖院住職

鷲雄興勝

〒235 磯子区東町六一二〇
☎電話 七五一―〇六七二

横浜市仏教連合会堂務理事

鶴見区仏教会長

真言宗智山派東漸寺住職

森岡隆沖

〒230 鶴見区潮田町三一四四―二
☎電話 五〇一―二三八八

横浜市仏教連合会常務理事
西区仏教会長

法華宗勸行寺住職

都築哲信

〒220 西区南軽井沢九
☎電話 三一―一三五五七

祈

人身安穩 国土安泰

横浜市仏教連合会参与
神奈川 県 仏 教 会 長

天台真盛宗新善光寺住職

福 永 隆 昭

〒232 南区三春台一三三
〒電話 二三一—五七五四

神奈川県 神奈川区 仏教会役員
浄土真宗本願寺派
善龍寺住職

齊 藤 幸 紹

〒221 神奈川区 斎藤分町三三
〒電話 四九一—九四三一

横浜市 仏教連合会 常務理事
保土ヶ谷・旭区 仏教会長
高野山真言宗大仙寺住職

安 達 宏 識

〒240 保土ヶ谷区 霞台一五—一六
〒電話 三三一—二九〇五

横浜市 仏教連合会
墓地委員会 委員長

臨濟宗 建長寺 派 洪福寺 住職

奈 良 光 雄

〒220 西区 浅間町五—三八—九
〒電話 三二一—四六七—一

横浜市 仏教連合会 会計

浄土宗 浄念寺 住職

橋 下 賢 明

〒233 港南区 野庭町一八四—三
〒電話 八四二—七二八八

横浜市 仏教連合会 会報担当
真言宗 豊山派 西福寺 住職

備 前 恭 忍

〒246 瀬谷区 橋戸三—二—一二
〒電話 三〇一—六一三四

横浜市 釈尊奉讃会 事務局 長
曹洞宗 東照寺 住職

程 木 徳 明

〒223 港北区 綱島西—一—十三—十五
〒電話 五三一—一七八三

横浜市 仏教連合会 常務理事
神奈川区 仏教会長

曹洞宗 本覚寺 住職

守 長 尚 文

〒221 神奈川区 高島台一—二—二
〒電話 三二二—一〇一九—一

横浜市 仏教連合会 常務理事
泉区 仏教会長

臨濟宗 円覚寺 派 長福寺 住職

橋 本 良 修

〒245 泉区 和泉町三六—五—九
〒電話 八〇二—二二—一三

横浜市 仏教連合会 常務理事
戸塚区 仏教会長
浄土宗 西蓮寺 住職

吉 水 法 雄

〒245 戸塚区 名瀬町二—四—七八
〒電話 八一—一〇—四六八

横浜市 仏教連合会 常務理事
金沢区 仏教会長
浄土宗 光伝寺 住職

安 田 旭 成

〒236 金沢区 六浦三—二—十一
〒電話 七〇一—一八—三三六

市仏連主催、鶴見区仏教会当番市釈尊奉讃会協賛の第二十回涅槃会が平成七年二月十一日(土)に鶴見駅前前の豊岡の曹洞宗成願寺(広沢道秀住職)を会場として、法要と法話をもって営まれた。穏やかな天候にも恵まれ、天正三年開創で本尊釈迦如来を祀り、大本山総持寺の横浜移転に際し所有地の大半を提供したという由緒ある医王山成願寺へ約一七〇名の人が参集した。受付で涅槃供物の京干菓子入り小箱や奉讃会日より、禅の友誌などを配り、募金箱を置き阪神大震災被災者への救援金をお願いした。

一時半より、本堂本尊前に掛けられた成願寺蔵大涅槃図(東順常春画)の釈迦涅槃像に香花供物を供へ、大導師滝川覚道市仏連会長が啓白文を誦誦し、鶴見区仏教会会長森岡隆冲師を始め各寺院僧侶が式衆を務め、光永寺(荒原光春住職)梅花講の涅槃和讃、それに全員で三帰依文、観音経普門品偈を誦経し、仏陀釈尊の大恩徳に報謝の誠を込めて、ご法案を捧げた。そして五千人を超える死者を出した阪神大震災殉難者の慰霊大法要を執行した。お焼香をし般若心経と舍利札文と追善和讃と回向文を唱和して供養を申し上げ、諸霊のご冥福を祈念した。二時十五分頃法要終了。トイレ休憩の後、滝川覚道市仏連会長、程木徳明市釈尊奉讃会事務局長、横山敏明仏副会長、森岡隆冲鶴見区仏教会々長の各師が挨拶をされた。森岡師は二十回目的涅槃会を当区仏が担

当し、成願寺様には心良く立派な会場を提供いただき、講師には佃野町の真宗大谷派智廣寺住職の橋本正博先生が『自灯明・法灯明』の演題で話をしてください。鶴見区仏教婦人会や京浜葬祭、区仏各寺院や檀信徒奉讃会の方々も協力支援下さった。釈尊報恩涅槃会と大震災殉難諸霊の供養もできました。市仏連諸役、各区仏諸大徳、奉讃会員の方々も含め、大勢が寒中、遠近より都合をつけて、お詣りいただき、誠にありがとうございました。

二時四十五分から三時四十分頃まで、『自灯明・法灯明』の演題で、橋本正博先生がお話をされた。

第二十回釈尊涅槃会開催 並びに阪神大震災殉難者 慰霊大法要執行

無常の身の事実の自己をよく知った立場を依り処とし、他を依り処とするなかれ。他とは心であって幻であると教えてくれる『法・真理』を依り処とし、怠りなくつとめよとの言葉をお釈加さまの励ましと受け取めて、いのちを尽して只今を生きてください。という内容を巧みな話術で説き聴かせた。川上敬吾市仏連副会長兼専務理事が閉会の言葉を述べた。募金箱をあけたところ三万二千四百二十円も入っていました。阪神大震災救援金として、被災者へ送らせていただきます。本日は色々ありがとうございました。

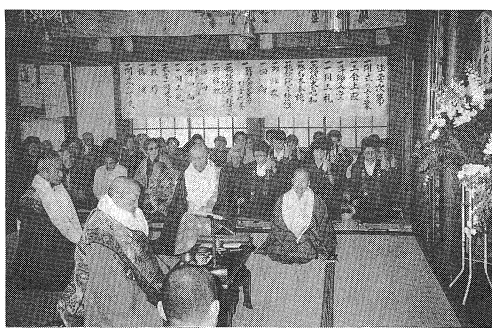
反省会を成願寺客殿で行い、四時半過ぎに散会となった。

以下は『自灯明・法灯明』橋本正博先生の講演要旨である。釈尊の最晩年にマガダ国王舎城から出発して北へ直線距離で三百kmのクシナガラまで約一年半をかけての説法の最後の旅について、大涅槃経によつてのべました。自らを依り処とし、他を依り処とする勿れとの有名な説法ですが、自分で本当に依り処となるんでしょうか。自己とは何ぞや。自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗託し、任運に法爾にこの現前の境遇に落在せるもの、即ちこれなりと清沢満之の言葉です。某寺院の報恩講でのキリスト教の牧師の話です。指紋の特長に終生不変と万人

異なる二つがある。変らない自分を引き受けなさい。誰もと替って貰う事ができない独自性というのが。それを聞いて阿弥陀経の青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光の説話を思いました。青は青で輝いている、黄色になる必要はない。私達は誰とも替って貰うことのない今の自分を生きていく。嫌でも生きてゆかねばならない。本当の自分を知ること、溺れる者ワラをも掴む。心理としてわかるが溺れるもの掴んだワラで沈みゆく。不確かな依りどころにならないものをつかんだら一緒に沈んでしまい助からないんです。自灯明(鳥)・法灯明(鳥)

の鳥は流者にとつて依り処(確かなもの)、灯明も闇に迷っている者にとつての依り処となります。次に他を依り処とする勿れの他とは何か。それは他人。自分であるようで自分でないもの・地位名誉、お金、健康などは本当の自分でしょうか。家も地震がくれば無くなってしまう。縁のある間は自分の所に在るだけ。自分の思いこみ、忘念忘想としての自分、あの時あであった、こうだった(過去未来)などが「他」・自分以外のものなのかなあと感じます。

自己というのを再び考えます。要するに身の事実です。身を持っている以上、仏陀といえども八十歳を一期として入滅していくのだぞという身の事実を、お釈さまが証明された。私達の思いはいつまでも死なないでいたい。身の事実と反している自分の思いを依り処としているのが私達の日常です。幻の心に依らず、ありのまま



の・現実の・本当の・事実の自分をキチッと依り処として生きなさい。今日、この日は生まれて始めて迎える、この今なんです。この今を大切に命を尽くして生きなさい。悩んでいる私達に、事実立って自分をごまかさず、怠らず精進して悔いなき人生を生きなさい。時空を超えてのお釈さまの励ましの言葉として、自灯明を受けとめて生きたい。その自分を本当に知らしめて下さるのが法・真理なのです。法の裏付けがなければ、我々は自分の思いばかりで生きてしまう。思い通りにならないと思病を言ったり怒ってみたり貪り暮らしてですね。法は心を幻と教えて下さるものです。法に裏付けされた身の事実にか立って生きなさいという、お釈さまの励ましをお聞き届けになっていたければありがたいことです。

(文責備前)



支部だより

戸塚区

平成六年三月一日より前会長の西屋俊雄師が他の公務の役職に付かれたので、その留任期間として六年度の会長を引継ぎをした。そのため、県仏・市仏の役員のことも行ないました。

そこで本年度の区仏教会がとりました方針と内容を略述します。(一)役員の人異動を最少限にとどめた。

副会長を一名にして、長谷川師の監事の退任を認め後任は西尾師とする。

(二)予算、行事内容については前年度を踏襲する。

(三)他都市より転入し設立された寺院の加入を認める。

東京都より単立寺院(法華系)常玄寺が舞岡町に建立。今後のご発展を願うものであります。

四区仏総会については、県仏・市仏の総会終了後に実施することにより活動と行事内容が充実することが図れることを確認した。

一年間を反省してみると仏教活動が政治、経済、文化の発展に重要なことを認識しました。始めての会長でありご期待にそえなかった点をご寛容ください。

栄区

昭和六十一年十一月三日、戸塚区から栄区、栄区が分区分しました。それに伴い、遺族会も三区に分かれ、戸塚区遺族会、栄区遺族会、栄区遺族会と呼称しています。



その三区の遺族会が、年に一度持ち回りで、合同慰霊祭を行ってきました。今年は、栄区遺族会が当番になるので、との申し出を受け、仏教会に諮りましたところ、終戦五十回忌の年であり、全員でご回向を、と決まりました。

平成六年八月二十六日、区内の浄土宗・大誓寺に相集い、三区の遺族約百七十名の皆さんと、「般若心経」を読み上げ、「精霊ご和讃」をお唱えして「三区合同戦没者慰霊法要」を厳修しました。

暑い夏の日でしたが、遺族の皆さん方は、栄区仏教会よりの贈り物「うちわ」で風を送りながら十時からの法要。続いて県遺族会理事氏の講演。昼食後は各区ごとの研修会と盛り沢山の内容をごこなしておられました。

泉区

泉区は近年、水と緑の田園都市を目指して着々と整備が行われて

おります。数年後には相鉄いずみ野線地下鉄路線の湘南台への延伸等、更に便利で住みやすい環境に変わりつつあります。

泉区仏教会は本年、七周年を迎えて会員数十三ヶ寺にて活動しております。宗派の割合は浄土宗六ヶ寺(内一ヶ寺兼務)、曹洞宗三ヶ寺、真言宗二ヶ寺、日蓮宗一ヶ寺、臨済宗一ヶ寺となっております。

近況と致しましては今度の阪神大震災の惨状は誠に筆舌尽し難く、当仏教会においても早速に臨時総会を開き、少しでも復興のお役に立てればと、二月四日(土)に、

いずみ中央駅前にて手造りののぼり竿と募金箱を持ち、義援金托鉢を実施致しました。日頃ボランティアや或いは奉仕と云う言葉を口にしながら、言うは易く行い難しの格言のように、たとえ僅か半日の活動でありましたが、多くの事を学び、反省することも又、多々で誠に、所得多き「托鉢行」でありました。寒気身に凍みる中、御協力を頂きました会員の皆様、改めて御礼申し上げます。これからも地域社会の中で存在感のある、行動する仏教会をめざし会員一同、一層の努力をしていきたいと思っております。今回の托鉢の浄財金に会員の協力を加え、合計、四十二万三千四百六十一円也を神奈川新聞厚生文化事業団に寄託をさせて頂きました。被災地の日も早い復興を会員一同、心より祈願申し上げます。

泉区は近年、水と緑の田園都市を目指して着々と整備が行われて

次回の支所便りからは、泉区寺

院十三ヶ寺を各会員より紹介したいと思います。

港北区

恒例の花まつりを妙蓮寺様釈迦堂をお借りして厳修、幼稚園児と観音寺様、保福寺様のご詠歌のご参加により盛会に行なわれました。四月には、税務署、税理士さんを招いて、税務研修会を開催しました。ご出席の各寺院から熱心な質疑応答がありました。七月には鶴見川の花火大会には、会員のご協力により灯籠流し供養を行い一千灯の灯籠が夕ぐれの水面に区仏寺院のご随喜の諸大徳の法経の中を流れて行きました。

十月五日には、県慰霊堂の法要を勤修させていただきました。十一月六日には永年お世話様になった港北仏教会から、中川地区の寺院が都筑区に縮入されました。港北区仏教会の各寺院の諸大徳に大変お世話になりましたことを、厚くお礼申し上げます。

活動ならびに事項日誌
6・9・3・13時。於公会堂
文化講演会、講師・金沢文庫理事 長真鍋俊照。余興、落語と三味線
・美由紀と柳八。
6・9・3・17時半。於真鶴会館
講演会終了後総会、議題・交通安全祈願法要の件、寺院、仏婦、奉
議会役員、計三十五名。
6・10・22・14時。於称名寺
交通事故物故者追悼法要、並びに
交通安全祈願法要厳修、物故者施
主は14名出席。

金沢区

6・11・7・10時。於慰霊堂
県慰霊堂奉仕、光伝寺、宝珠院、
薬王寺(法話)、龍華寺、光明院
参拝者百二十名。
6・11・7・13時。於西有寺
県仏教会成道会、出席寺院(龍華
寺、持明院)。
6・12・3・15時。於金龍禅院
税務研修会、講師・細淵慎一先生
研修テーマ(宗教法人の経理処理
について)十五名出席。
6・12・11・16時。於時田壽司
理事会・文化講座、交通安全、税
務研修、各決算報告、涅槃会、富
岡地区花祭りの件。
7・1・14・16時。於金沢園
区仏新年総会・文化講座、交通安
全、税務研修、各決算承認される。
涅槃会の案内、花祭りの案内、伊
豆方面参拝旅行の案内。19名出席
7・1・22。金沢区仏教会より、
阪神大震災地へ義援金を贈る。
7・1・25・18時。於霧笛楼
仏教青年会の「金沢霊場めぐり」
出版記念開催。十名出席。
7・1・26・17時。於華正楼
県仏の第二回理事会(会務中間報
告、他)並びに新年賀詞交換会、
出席寺院(龍華寺、持明院)。
7・1・29・10時。於自性院
自性院小西順光住職、古希のお祝
い、座布団贈呈。三役が訪問。
7・1・31・7時。於銀水荘
釈尊奉讃会、新春一泊参拝旅行。
西伊豆方面、八十七名参加。
7・2・15・10時。於龍華寺
第35回、区仏涅槃会厳修。*阪神
大震災二回目の義援金を募る。

次回の支所便りからは、泉区寺

会長 安田旭成 記

支部だより

保土ヶ谷・旭区

区役員名簿

- 会長 安達宏識 大仙寺
- 副会長 渡井奎一 長見寺
- 副会長 山本尚亨 正福院
- 庶務 林田真成 見光寺
- 会計 高島善隆 浄性院
- 監査 吉川瑞浩 三仏寺
- 監査 細川秀純 金剛寺

当区仏の活動現況を御案内申し上げます。平成六年四月現役員体制の下、四月八日前会長楠正舜師正圓寺本堂に於て釈尊降誕会の法要を執行。奉讃会員檀信徒百数十名の御参集の上、山主の御法話を頂き参加者一同感銘深くして盛大に終了出来ました。五月十日春の仏跡参拝旅行を計画坂東三十三ヶ所の内27番円福寺。番外満願寺に参詣参加者は二百三十九名でした。十一月廿五日秋の仏跡参拝には坂東26番札所清滝寺と番外日蓮宗本土寺様に参詣参加者百五十名でした。十二月八日成道会を修行。旭区長楽寺にて百七十名の参加を得て法要後松濤基道先生のユニークな講演に喜びを得て会場の心温まるケンチン汁の御接待を頂き大盛會にて絶了。十二月廿四日歳末助合い托鉢を行い保土ヶ谷・天王町・二保川各駅に集合午後二時より四時迄募金。三十五万九千七百七十九円也を神奈川新聞厚生文化事業団に寄託した。一重に会員諸師の一味和合の真心に依る処と感謝の意

を表するものであります。

文責 安達宏識



義援金の報告

市仏連(滝川寛道会長)は義援金として五十万円を、神奈川新聞福祉厚生事業団を通じて、阪神、淡路大震災被災地へ送りました。また成願寺様での市仏連主催釈尊涅槃会での募金による三万二千四百二十円也も同事業団に寄託しました。そして、市釈尊奉讃会の予備費から金十万円を日本赤十字社に寄託させていただきました。

税務講習会

平成六年十一月二十一日(月)の午後二時に西有寺様を会場にして税務委員会(斎藤隆法委員長)の担当設定で、税務講習会を催した。各区仏税務委員を含めて、二十名程が出席された。

講師は平山紀美子先生。自著のセオリ「税務入門や政権与党の税制改革大綱(案) 抜粋を資料として消費税や相続税について解説くださった。出納簿、年末調整、給与、源泉徴収などをしっかりと記帳管理していれば何か起きてからの税務調査だから、そう心配することはないと、斎藤委員長の補足談である。

平成七年度

泉慰霊堂奉仕当番表

- 七・四・五 保土ヶ谷旭区仏
- 七・六・五 鶴見区仏
- 七・十・五 戸塚区仏
- 七・十一・六 泉区仏
- 八・二・五 栄区仏
- 八・四・五 瀬谷区仏

事務日誌

6 10 20	市仏連発 涅槃会打合せの案内
6 11 1	市仏連発 理事会 忘年会の案内
6 11 2	市仏連発 税務研修会開催の案内
6 11 14	市仏 鶴見区仏涅槃会第一回打合せ 於成願寺
6 11 21	税務研修会開催 於西有寺
6 12 5	理事会 忘年会 於桂月内
7 1 11	市仏連発 諸役会開催案内
7 1 13	市仏連発 涅槃会案内状配布願
7 1 13	市仏連発 涅槃会随喜依頼案内
7 1 13	市仏連発 涅槃会講師依頼
7 1 20	諸役会 於桂月
7 1 23	市仏連発 役員選考委員会 開催案内
7 1 25	市仏連発 会報原稿依頼
7 2 3	市仏連発 奉讃会だより配布依頼
7 2 7	市仏 鶴見区仏涅槃会第二回打合せ 於成願寺
7 2 11	第三回涅槃会 於成願寺
7 2 13	役員選考委員会開催 於四川飯店
7 2 17	市仏連会報四十号初校正
7 2 27	市仏連会報四十号編集 於長昌寺

編集後記

◎フランス在住のヴェトナム人仏教僧ティク・ナット・ハン師の提唱、エンジゲート・ブディズム(自らと社会に関わり行動する仏教)に注目しよう。寺を出て人々を助けるが、それをマインドフルネス(気づきと注意深さ)をもって行動する。一人一人がまず仏教を実践して平安と喜び、幸せに満ちた日常生活を創造するという足元からの変革をなによりもまず大切にす。ひとたび見ることができたなら、行動が伴わずにはいられません。さもなければ、何のための見ることなのでしょうかと。かつてベトナム戦争のさなか、僧院の中で修行を続けているべきか、街に出て爆撃で苦しむ人々を助けるべきか、悩んだ若い僧の一人が、よくよく考えた末に、その両方をやろうと決めたことに発する。(大法輪誌の藤田一照師、中野民夫氏の紹介文章より)。

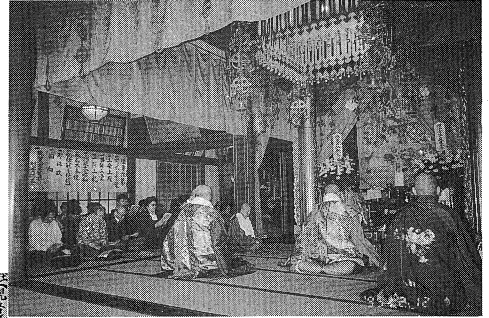
◎四国路遍路の記を玄野孝善市仏連副会長に書いていただいた。四国の山野を巡拝して自らを清め、人生の旅路の苦楽を歩くことよって体験し、感得して、生まれ変わった菩薩としての活動を願った弘大師さまの大慈悲と大智慧の御功德を頂戴できた旅であった。

◎釈尊涅槃会も第二十回をかねて鶴見区仏各位の熱心な行動と配慮のおかげで、無事成満できた。法話も実にありがたかった。仏さまのおはからいで現前としてここに在る我々は、その無常の身の事実依って、四苦八苦の現状から立ちあがるしかない。諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印、四諦八正道などは真理である。

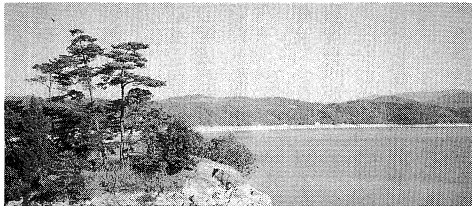
記念



於成願寺本堂



第二十回 釈尊涅槃會
担当 鶴見区仏教会



四国遍路の旅

